

# 第7回 天然アユ生態調査実行委員会議事要旨

## 1. 会議概要

○日 時：平成30年6月22日（金）10:00～12:00

○場 所：豊田市職員会館3階 第1部室

○出席者（規約の名簿順）

（アドバイザー）高橋 勇夫（たかはし河川生物調査事務所 所長）

（アドバイザー）村上 哲生（中部大学 教授）

（アドバイザー）内田 臣一（愛知工業大学 教授）

（アドバイザー）赤堀 良介（愛知工業大学 准教授）

（委員長）加藤 重雄（矢作川漁業協同組合 代表理事組合長）

（委員）新見 克也（矢作川天然アユ調査会 会長）

（委員）神本 崇（国土交通省 中部地方整備局豊橋河川事務所 事業対策官）

（委員）大木 克彦（愛知県 豊田加茂建設事務所 河川整備課長）

（委員）早川 匡（豊田市 河川課 課長）

（委員）中川 啓二（豊田市矢作川研究所 所長）

（事務局）豊田市矢作川研究所

○議 事

- 1) 前回議事録の確認（資料1）
- 2) 矢作川河床改善によるアユの生息環境の回復（資料2）
- 3) 矢作川産天然アユの産卵環境改善（資料3）
- 4) 明治用水頭首工におけるアユの遡上状況（資料4）
- 5) 平成29年度決算報告（資料5）
- 6) 平成30年度予算について（資料6）

## 2. 議事録要旨

（1）前回議事録の確認

事務局が資料1をもとに説明。

### ■訂正の指摘

（委員）パワーポイント2頁目の底生動物の結果を「約6ヶ月後 礫=対」から「礫：ヒゲナガワカトビケラ 対：オオシマトビケラ」に訂正。アユの良好な生息場の指標はヒゲナガワカトビケラで、この種の優占した河床を維持することが重要である。

## (2) 矢作川河床改善によるアユの生息環境の回復

### ■主な意見等

(委員) 巨石に統一するのか？ 複数の表現は避けた方が良い。「礫置き区下流」という表現はわかりにくい。「礫置き区(下流)」とか「下流礫置き区」が良いのでは。  
(事務局) より分かりやすい名称を検討します。

(委員) 今回クレンジング区に置いた土砂はクレンジング効果を狙う粒径では無いので、実験のねらいを現状用意できる土砂を置いた場合、どのような効果があるのかという解釈にした方が良い。

(事務局) 了解しました。

(委員) クレンジング区においた土砂の粒度分析は当方の研究室で引き受ける。

(事務局) ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

(委員) 1平方メートルの方形枠では、なわばりがおさまりきらない。透視度の問題もあり、調査自体に無理があるのでは？ 潜水者から1メートル離れて方形枠をとることが望ましいが、調査自体の難しさもわかる。トライアンドエラーで進めていくしかない。

(事務局) なわばりの範囲を把握する際には潜水しながらゆっくりと移動するしかない。試行錯誤しつつ取り組みます。

(委員) 「H30 礫置き区下流」の流速はアユの巡行速度を上回っている。流れが強すぎることが制約となり、なわばり形成が制限される懸念もある。また巨石群はもう少し巨石の間隔を離れた方がよい。

(事務局) 「H30 礫置き区上流」と比較しながら調査します。巨石の間隔をもう少し離すようにします。

(委員) アユが定位する(休息する)位置は把握しにくいと思う。食む位置と軌跡を主体に記録するのが現実的だと思う。

(事務局) 記録方法を検討しつつ調査していきます。

(委員) 友釣りのアユが針に掛かった感触や位置から、なわばりアユかどうかを判断するのは簡単ではない。調査員毎に判断の基準が異なる恐れがあり、参考程度にみておくべき。巨石を置くことでなわばり形成を促進する効果があれば、釣果に反映される。

(事務局) 検討します。

(委員) 透明水中水路実験は DO ロガーを用いた一次生産量の解析で、曝気係数を考える上で興味深い実験である。是非、データを取ってほしい。その際、現場で袋法を用い、光合成活性も測定しておくこと。

(事務局) 実施します。

(委員) 袋法で H29 礫置き区の光合成活性が高い値を示したのは、アユが集まって捕食圧が高まり、優占種の藍藻の増殖が盛んになったと理解できる。

(事務局) 今年度はその光合成活性の高さを室内培養でも検証する予定である。

(委員) 出水で阿摺ダムからどれぐらいの量と粒径の砂礫が出るか、阿摺ダムの堤体にどの粒径の砂礫が貯まっているかを知りたいので、矢作川総合土砂管理の視点で、国土交通省か中電に聞いてほしい。出水により数ミリの砂礫が供給され、トビケラの巢材料になっている。砂利トラップを置いて調べるのも良いのでは。

(事務局) 検討します。

(委員) H29 年 10 月の出水で礫置き区の礫が動いている。出水で部分的に動くことがあるので測量データで把握するのがよい。

(事務局) H30 春に測量を実施しましたので、データを解析します。

### (3) 矢作川産天然アユの産卵環境改善

事務局が資料 3 をもとに今年度の計画を説明。

#### ■主な意見等

(委員) 柔らかい河床では伏流水が湧出するため、産卵場評価の 1 手法として水温測定も考えられる。産卵場と伏流水に関する研究事例を参考に検討してください。

(事務局) 事例調査し、検討します。

(委員) 調査範囲の上流側は河床が礫で、下流側は砂となるため、全流程で河床軟度と産卵状況を同様に比較するのは困難である。河床の状態に合わせて評価方法を再検討したほうがよい。

(事務局) 調査地点によって評価方法を変える等の検討をします。

(委員) 流下仔魚の減耗の要因解明は昨年度で終了か。

(事務局) 昨年度までの調査結果から、減耗の要因は滞留の可能性があった一方で、大幅な減耗が無い調査日もあり恒常的な現象ではないことを明らかにした。産卵そのものの課題整理も急がれるため、今年度は産卵場の現状把握を重点的に行います。

### (4) 明治用水頭首工におけるアユの遡上状況 (資料 4)

事務局が資料 4 をもとに説明。

#### ■主な意見等

特になし

### (5) 平成 29 年度決算報告 (資料 5)

事務局が資料 5 をもとに説明。

#### ■主な意見等

特になし

(6) 平成 30 年度予算について (資料 6)

事務局が資料 6 をもとに説明。

■主な意見等

特になし

(7) その他

(委員) 本会は豊田市が中心となりアユの暮らしやすい矢作川を目指して調査研究活動をしているため、国や県等の河川管理者が行う事業について、委員から情報提供を受けたり、その事業とアユの生息環境について議論したりできると良い。

(委員) 身近なアユを対象に調査研究しているため、本会の活動を一般市民に知ってもらうことも重要である。アユ遡上調査の機械化や場所の都合で、今は市民に見てもらうことができなくなっている。

(事務局) 人手や安全面等で問題もあるが、漁協等関係機関と相談しながら考えていきたい。

以 上